

# 一年国語乙の実習指導について

竹 内 昭

## 指導方針について

第一週の前半、指導教官の授業参観のあったあと、私は教生に対してこれからはじめられる実習について、各自自由な立場で指導案を作成し、自分の個性を生かした授業をやってみる事を強く要望した。

私がこのような要望を強く打ち出した理由は、私自身数年前に同じように三週間の教育実習を受けたのであったが、その時の事を今自分が指導教官という立場になって、反省してみたのであった。

というのは、その当時自分のおこなった授業を、今ふりかえって見て、果して新しい国語教育の根本精神を、どの程度理解して授業をおこなったであろうか、亦自分の実力を発揮するための基礎的な面での努力がなされたであろうか、というような点で大いに疑問がもたれたからである。実際私の場合、板書をどうするか。自分の声が教室全体にとどいたろうか。一つの説明事項について、これをどこでどのように説明したらより効果があるか等々、形式的な教育技術の面のみ目をうばわれて、このような教育技術が、自分に実力をつけることによって、はじめて発揮し得るのであるという最も肝要な点に気がつかずに終わったのがい経験が、反省として今なお残っていたからである。

勿論今のべた形式的な教育技術の面が、教生にとって不必要なものであるというつもりは毛頭ない。確かに大切なことではある。しかし、国語教育が単に教育技術の上手下手によってきめられるものでないといいたいのである。国語教育の一つのさだまった型というものがある、その型にあてはまった教育が最も良い教育であると考えることができないというのである。前にものべたように、教育技術というものは、各々の人の実力から、個性からあみ出されてくるものであって、一定の型にひきずられているような状態では真の国語教育というものはできないのではないだろうか考えるのである。

以上の諸点を今度の教生諸君によく理解してもらって、できるだけ形式的教育技術の面の注意は、指導する私自身もおこなわないことにし、教材をどの程度こなし得るかという点に主眼を置いた批判をしてみたいと思い、教生諸君にも特に要望したのである。

具体的にいえば、国語乙の教材として使用している徒然草のある一段を、ただ一時間教えるだけであっても、教える前にまづ徒然草の本文全体を読み、更にそれに関する主要な研究論文、註釈書にも目を通しておく位の準備の必要性をとぎ、その上で各自自分の考えをもって教室にのぞんではしいことを要望したのであった。

しかし、この私の要望は、あまりに理想に走りすぎたようであり、教生諸君にとっては、非常に無理な注文であつたらしく、結果的にみでみると、やはり教生諸君にとっては、いかに上手に教えるかという目前の技術的な面に追われ通しの三週間であつたようで、私の要望した、各自個性をもった授業をやってくれた教生は少なかつたのであつた。

従ってこの三週間に教生諸君が最も強く感じたことは「教える事のむつかしさ」という事であつたらしく、どの教生諸君の反省日誌にもこのことが書かれているのである。

「教えることのむつかしさ」を知ったということは、確かに尊い経験であつたろう。しかし私にいわしむれば、もっと他に体得してほしかった事があつた。何かといへばこのような問題は力をつけることによって自然と解消されるのだということを知ってほしかったという事である。この事は現在の私自身に対するいましめでもあるのである。

### 教材の選定について

一年国語乙の場合、一学期に古典入門の意味をもたせて「竹取物語」を教材として使用細かい語句の説明とか、文法的な説明などは出来るだけはぶき、読むことと、物語のストーリーを把握するという点に主眼を置く授業を試みた。勿論一学期に「竹取物語」を教材として選んだことも、読みと大意の把握に主眼を置く試みも、初めてやってみた事で、結果的にみての良し悪しは急に断定できないけれども興味をもって読むことができたという生徒の声をきくことができた。

二学期は教材として「徒然草」を選してみた。勿論抄本である。そしてこれまで「竹取物語」でやってきた大意の把握だけでなく、内容的にも深く追究させ、更に文法的な問題についても多く取りあげ、一言半句もおろそかにできない点についても注意する方法を取る事にした。

教育実習は十月一日からはじまったわけで十段程終った時であつた。従って教生には、特定の段を選ぶことなく、私のやってきた所をそのまま引続いて順次やってもらう事にした。三週間の実習期間中（大体五時間）に、第十九段「折節の移り変ること」第二十一段「よろづのことは」第二十五段「飛鳥川の淵瀬常ならぬ」第二十九段「しづかに思えば」第三十五段「人のなきあとばかり」以上の五段が教生によって指導されたわけである。

### 教生の授業について

指導案は原則として授業を行う前に指導教官に提出、指導教官はその指導案が妥当か否か検討することになっていたが、提出された指導案について、私の場合、指導内容の面での修正を要望する事はしなかつた。従ってABCと各組、各々異つた教生によって教授される場合には、組によって多少の相異が出て来る場合もあつたが、特別に支障がみとめられぬ限り自由に指導をしてもらつた。

次にあげる三例の指導案は、第十九段「折節の移りかはるこそものごとにあわれなれ」の段を担当した三人の教生の指導案である。

（指導案中「単元及び学習内容」の項は今の場合必要がないので省略「本時の目標」及び「学習活動」の項だけを引用することにした）

#### A 教生

##### 一、本時の目標

- 1, 文法、助動詞を中心として意味の正確な把握
- 2, 可能な限りに於いて、各段落に現れた作者の思想の追究
- 3, 研究問題によって本文の分析

※筆者注 研究問題には

- 1, A 本文を読んで何について書いてあるかを十字以内で述べなさい  
B 本文を五つに分け各段落のあとに「印をつけなさい」  
C 各段落ごとに何について書いてあるかを十字以内で説明なさい
- 2, 「あわれなり」「をかし」「面白し」の語の内容を研究してみよう
- 3, 文法的設問（省略）  
とあり、その個々の設問に関しては相当に問題があるが、ここで論ずることは省略する

二、学習活動

- 1, 指名読 生徒の担当域が決っているからその順序で読ませ、解釈させる。指導者の読みについての注意
- 2, 通読及び解釈（指導者）文法及び解釈は指導者が読んでゆく中に取上げ、生徒に解決を要求する
- 3, 研究問題、生徒に解答を求め、その答、意見を正解に導く、例えば「をかし」「あはれ」「面白し」について生徒の意見（三名程度）を求め、それを結論に導く

B 教 生

一、本時の目標

- ここは徒然草中特にすぐれた一段であるから、その点注意しながら
- 1, 本文の意味をしっかりと掴む（解釈上から）
  - 2, 内容の要点を考えてみる

二、学習活動

- 1, 指名読及び通釈（二名）読みながら読みについて間違いがあれば正し、通釈に際して問題点がでたら、それを他の生徒にも考えてもらって、意味を求める
- 2, 本校は相当長くて、生徒の活動だけにまつことは難しい。その理由で(1)に於いて行った活動の後、指導者が段末まで(1)のやり方に従い文法的な問題を指摘し、あるいは解答させる
- 3, ここは四季によって段落に区分することが出来よう。それに従って内容の要素を考察する

※ (2), (3)に於ける諸問題点は指導者があらかじめ用意してある（なお本段をこの一時間で終ることは出来ないと思われる。）

C 教 生

一、本時の目標

- 1, 第十九段の語句の意味を通じて、全文を理解する
- 2, 第十九段に表現されている作者の気持を汲み取る

二、学習活動

- 1, 生徒の通釈
- 2, 担当者が注意すべき所を指摘しながら通釈

注意すべき所

<u>いひつづくれば</u>	(活用)	<u>やりすつべき</u>	(活用)
<u>暮れはてて</u>	(ク)	<u>あはれにやんごとなき</u>	(ク)
<u>寒けくすめる</u>	(ク)		

### 3, 研究問題を指名して全文をまとめる (二名~三名に指名)

ここに挙げた三例の指導案は、多くの指導案の中から任意に選び出したのであって、その良否を云々するものではない。

まづこの三例の指導案を分析してみよう。第一に本時の目標の所では、意味の正確な把握、作者の思想、気持の正確な理解という二点で各々一致している。次にこの目標をどのように展開させるかという活動の面でも、多少の相異——解釈上文法的な説明を多くするか少なくするか。語句の説明を多くするか、少なくするか。解釈の場合指導者が主になって解釈するか、生徒に主にやらせるかなど——は見られるにしても、生徒に読ませ解釈させ、その不備な点を指導者が指摘しつつ再度釈して行くという方法を共通してとっている。ただ強いてその相違点を求めるとすれば、B 教生が特に内容面に重点を置いている点が挙げられるかも知れない。

次に授業の経過と担当教生の反省、参観教生の感想について見てみよう。

A 教生の場合「ものあわれは秋こそまされ」の個所で万葉巻一の額田王の「秋山われは」の歌の板書に相当時間をくいと、更に文法の説明がすっきりできず予定の半分位で時間が終って了った。

B 教生の場合、同じく時間が足りなかったが、これは文中のいろいろの事項の説明に時間をくったためである。

C 教生の場合、A 教生、B 教生の授業を参観したあとだったために時間的な配分はうまくいったようである。

しかしこの三者に通じていえることは、ほとんどすべての時間が通釈と語句の説明に終わったということである。このことについては、またあとで述べることにして、次に担当者の反省について書いてみよう。

A 教生は、板書に時間がかかり進まなかった、文法は質問形式でやる予定だったが失敗した。

B 教生は、解釈しちがいが、説明不足の所が多くあった。

C 教生は自身のない所え来ると声が自然と小さくなり実力不足を痛感した。とそれぞれ反省している。

また、この三教生の授業について、参観した他の教生の感想の主なものを拾ってみると、A 教生に関するものとして、声量が少なく語尾不明、板書をもっと正確にすること、質問に対する種々の解答をうまくまとめる技術が必要である。B 教生に関するものとして、生徒の質問に答える技術を工夫すべきである。言葉と言葉の間に間をおきすぎる。C 教生に関するものとしては、声が小さい、授業の進め方がうまい等々、大体に於て教育技術の面の批評が多かったようである。これは実習の初期であったせいもあるだろう。

そこで問題は、この十九段の授業が、この三教生の指導でいいものかどうか、またこの授業の担当者の反省、参観者の感想が、前述の程度でいいものかどうかということが問題と

なつて来ると思ふのである。

私は冒頭から何度も繰り返していつているようにこれでは困ると思ふのである。古典を単に現代語に釈すだけでは之まで何年間か、何十年間か続けられて来た沈滞した旧来の国語教育の方法と変るところがないではないか。更に気になる事は、この授業で特に目立ったある教生の範読の際の甚しい誤読である。一例をあげれば「六月祓」を「ロクガツパライ」と読み「四方拜」を「ヨモ一ハイ」と読む類である。それに対する反省、批判がもっと強く出る事を期待したが、この種の反省批判があまりなかつた点である。即ち「いかにうまく教えるか」以前のもっと基本的な問題を忘れたのでないかという点である。

私にいわしむれば指導者は、このような問題にこそ最も注意しなければならないと思ふのである。勿論この一例は極端な例であつてこのような誤りが度々繰り返されたわけではないが指導者が本当に教材を読みこなしておればこのような誤りは当然ないはずである。何はさておき、このような誤りをおかさないという所から出発すべきでなからうか。

更にもう少し深く内容的な面について検討してみよう。解釈の点、事項の説明の点等においては、さして大きな誤りはなかつたが、目標の項で示された作者の思想（この段では思想ということばはあてはまらないかも知れない）の追求がA、B、C三教生共になかつた事、例えばB教生の場合、この文が徒然草中で最も秀れた一段であるという事、この段に作者の自然観賞の態度がはっきりと現れているという事を説明した。しかし、その秀れた点がどこか、どこに作者の自然観賞の特色があるかという具体的な説明にまでは及べなかつたようである。

あるいはまた枕草子の作者、源氏物語の作者の自然観賞の態度に比較すると独特の味があるとも説明した。しかしこれだけでは不十分である。古典に親しみをもちない高校生、まして一年生の力でもつてしては、この程度の説明では理解が困難である。具体的に例をやさしくくだいて説明する必要があるわけである。それをやるためには、引用した各々の作品、作者について十分に研究する必要があるわけである。私にいわしむれば、少くともこの段の最も主要な点はこの点だと思ふのである。この追求が三人の教生に共になかつた事は大きな欠陥であつたといえるのでないか。勿論これは教生だけの責任ではない。それらの資料を揃えて置かなかつた指導教官の側にも責任があるが、折角大学で「学問の方法」を学んでいる法文学部の学生であれば教育技術の面にのみ目をうばわれることなく、このような面にこそもっともつと力を入れてほしかつたと思ふのである。

最後にもう一例、最もまとまつていられると思われる指導案を紹介して置こう。

### 一年C組 国語科学習指導案

昭和31年10月15日 月曜3限

単元および学習内容

徒然草三十段「人のなきあとばかり悲しきはなし」を学習する。

本時の目標

- 1, 文法<特に助動詞>を中心にして意味を正確につかむ
- 2, 可能な範囲で、段落に現われる兼好の思想を考える

学習活動

- 1, 指名読（一名）導入の意味 — 5分—

2, 教科書の段落毎に, 次の学習活動を行なう

A, 通釈 (一名)

B, 指導者の訳 (要点—後述—を指摘して質問し, 生徒に解答を求める。ここで研究問題にも触れる)

C, 段落における大意を把握する —45分—

※指導上注意しようと思う点

1, 文法, 助動詞について, 次の「る」を考える。

{いと なみあへる  
一日五回は行かる

助動詞「なり」…「いむなる事」について, 次の例を掲げて区別させる。

「男もすなる日記というものを女もしてみむとするなり」(土佐日記)

2, 本文について, 次の傍線の語は何を指しているか

(1)年月をへてもつゆ忘るるにはあらねど「去る者は日々に疎し」といへることなれば, さはいへど, そのきはばかりは覚えぬにや。

(2)思ひいでてしのぶ人あらんほどこそあらめ, そもまたほどなくうせて

(3)さるは跡とふわざも絶えぬれば

3, 結論

冒頭の「人のなきあとばかり悲しきはなし」の一句は全文の中心思想を端的に表現した総序で「なきあと」は死の直後からすべてが消滅するまでの時間の経過をふくめたもの。つまり, 人の死後その人について記憶や遺跡が次第に薄らぎ, 遂にまったく忘れ去られる状態を, 時代の経過を追って描写してある。

上のことを引き出すために, 2Cで考えた大意を纏めるという過程で進みたい。

この指導案は研究授業のために, 特に詳しく書かれたものではあるが, よくまとまっている。授業の結果も要点をよくつかんだ授業ができたようである。ただ時間が少々不足だったようであるが, 一段の主題もはっきり生徒につかませることに成功したようであったし, 文法的な説明も要を得たものであった。前出の第一週目の指導案と比較してみても, この第三週目の指導案には長足の進歩のあとが見られる。

### おわりに

以上思いつくまま雑然と書きつらねて来たわけであるが, 要するに私のいわんとしていることは, 教育実習だからといって, 教育技術の面だけを習得したからとて, その目的が達せられるものでないこと。技術の面だけならば, 教壇に数年立っておれば自然と身について来るものであって, その技術を生み出す実力を養うこと, これが根本だというのである。実力をつけてこそ, 自然とその人その人の個性のあふれた独自の教育技術がみ出されて来るものである事を知ってもらうこと, これが教育実習の目的であると考えているのである。この雑文で教生諸君に対しては随分と遠慮のない暴言をはいしたが, 皆んな私の後輩であり, また私自身にいいきかせる言葉でもあると解釈して戴いて許してもらいたいと思っている。